

氏 名 谷 晃

学 位 博士(芸術学)

学位記番号 博(芸)乙第二号

学位授与年月日 平成十七年三月二十四日

学位授与の要件 学位規程第三条第四項該当

学位論文名 茶会記の研究

審査委員 主査 教授 倉澤 行洋

副査 教授 池田 有隣

副査 教授 山野 耕治

論文目録

第一章 茶会記とは何か

第一節 茶会記の定義

第二節 茶会記の内容

第三節 茶会記の種類

第四節 茶会記の目的

第五節 茶会記の残存状況

第六節 資料としての問題点とその克服

第七節 茶会記から何が読み取れるか

注

第四項 豪商

第五項 地方と女性

第二節 明治時代以降

第一項 高橋箒庵の『東都茶会記』

第二項 野村得庵の自筆茶会記

第三項 大師会と光悦会

注

第三章 茶道具の変遷

第一節 茶の湯以前の茶具

第二節 茶の湯の成立と茶道具の選定

第三節 佗数寄の成立と唐物の衰退

第四節 数寄道具の変容

第五節 国焼茶入と高麗茶碗の分類

第六節 大徳寺物と宗匠物の登場

第七節 名物と箱書

第八節 近代数寄者の茶道具蒐収と茶の湯美術館

第二章 茶会記に現れる人物の諸相

第一節 桃山時代

第一項 奈良

第二項 堺

第三項 博多

第四項 千利休

第五項 利休茶の湯の継承

第二節 江戸時代

第一項 茶匠

第二項 千家

第三項 大名

第四章 茶会記に現れた書画

第一節 絵画の様相

第二節 書跡の様相

第三節 掛物の変容

第四節 掛物と個人崇拜

第五節 フェティシズムの萌芽

第五章 茶会記に現れた中国産陶磁

第一節 茶会記における中国産陶磁の様相

第二節 中国産陶磁の種類別受容

第一項 青磁・白磁

第二項 天目類

第三項 珠光茶碗・人形茶碗

第四項 染付・古染付・祥瑞

第五項 呉須・南京・安南・交趾

第六項 南蛮・島物・宋胡録

第三節 中国産陶磁の受容の変化

第四節 中国産茶入について

第一項 序説

第二項 茶入とは何か

第三項 中国で発見された茶入

第四項 茶入の受用の変遷

第六章 茶会記に現れた朝鮮陶磁

第一節 対馬藩による釜山窯の経営

第二節 茶会記に見る朝鮮陶磁の様相

第三節 高麗茶碗の生産と輸入の状況

第一項 茶会記における使用例の概観

第二項 御本について

第四節 高麗茶碗の分類

第五節 茶会記に見る高麗茶碗の受容

第六節 いわゆる「御本」について

第七章 茶会記に現れた日本陶磁

第一節 茶会記に見る日本陶磁の様相

第二節 茶道具における中国産・朝鮮産・日本産陶磁の棲み分け

第三節 日本産茶入の分類

第八章 茶会記に現れた料理

第一節 茶料理の始まりと懐石の成立

第二節 茶料理の素材と調理法

第三節 菓子

第九章 点前の成立と変遷

第一節 点前の語句の変遷と意味

第一項 点前の語句の変遷

第二項 点前の意味

第二節 茶会記に見る道具の置き合わせ

第一項 床飾り

第二項 点前座の配置

第三項 道具の持ち運び

第三節 点前の変遷

第一項 「古伝書」に見る点前

第二項 松永久秀茶会における点前

第三項 『草人木』に見る点前

第十章 茶の湯における数寄について

第一節 数寄の歴史

第二節 茶の湯の数寄

第三節 茶数寄から侘数寄へ

第四節 侘数寄から侘茶へ

第五節 侘と「さび」

第六節 近代の数寄

表・図一覧

表2-1 『松屋会記』における席主の推移

2-2 織部茶会記における客層の推移

2-3 本阿弥家略系図

4-1 茶会記に洗われた絵画と書跡の分類による

構成比

4-2 絵画と書跡の年代別全茶会数に対する構成

比

4-3 絵画分類ごとの構成比の年代別推移

4-4 絵画分類ごとの頻出作家上位五人

4-5 書跡分類ごとの構成比の年代別推移

4-6 書跡分類ごとの頻出作家上位五人

5-1 中国産陶磁種別初見例

5-2 天目分類表

5-3 茶会記出現天目の種類と回数

5-4 茶会記記載祥瑞一覧

5-5 茶会記記載呉洲一覧

5-6 茶会記記載南京一覧

5-7 茶会記記載交趾一覧

5—8	茶道具使用の推移	7—1	窯名等茶会記初出一覧
5—9	中国産茶入の法量と比率	7—2	茶会記出現陶工名一覧
5—10	史料に見る中国産茶入の分類名称	7—3	中国・朝鮮・日本産陶磁の器種別初見例
5—11	贛州七里鎮出土擂座茶入破片	7—4	中国・朝鮮・日本産茶碗の出現推移
5—12	湖東路社会主義学院出土茶入破片	7—5	18世紀前半の器種別棲み分け状況
5—13	中国個人コレクター所蔵茶入の観察記録	7—6	茶入の分類
5—14	『隔蓐記』記載茶入関連記事一覧	7—7	茶会記・日記に現れた日本産茶入の名称
5—15	中国産茶入所蔵状況		
5—16	『寛政重修諸家譜』に見る茶入の贈答	8—1	16世紀茶料理素材一覧
5—17	『寛政重修諸家譜』に見る諸具の贈答回数	8—2	17世紀茶料理素材一覧
		8—3	18世紀茶料理素材一覧
6—1	釜山窯開窯状況一覧	8—4	19世紀茶料理素材一覧
6—2	茶会記出現朝鮮茶碗分類別推移	8—5	16世紀茶料理調理法一覧
6—3	武家使用朝鮮茶碗推移	8—6	17世紀茶料理調理法一覧
6—4	新渡朝鮮茶碗推移	8—7	個人別上位素材・調理法一覧
6—5	器種別朝鮮陶磁初見例	8—8	18世紀茶料理調理法一覧
6—6	分類名称の出現回数と初見	8—9	19世紀茶料理調理法一覧
6—7	高麗茶碗分類名称一覧	8—10	16世紀茶菓子一覧
6—8	高麗茶碗分類名称出現数推移	8—11	17世紀茶菓子一覧
6—9	高麗茶碗編年概略	8—12	18世紀茶菓子一覧
6—10	個人別使用高麗茶碗一覧	8—13	19世紀茶菓子一覧

9—1 床飾りの推移

図 9—1 盆に茶入・台天目の配置

9—2 茶碗に三つ組

9—3 台子に道具の配置

9—4 点前座の配置

現存茶会記一覧

初出一覧

論文内容の要旨

本論文は、二〇〇一年に刊行された『茶会記の研究』を基とし、これにその後に発表された論文二篇を加えて成ったものである。

全十章よりなる本論文の組み立てを概観すると以下のようになる。まず第一章において、茶会記とは何かを論じる。次に第二、九章において、調査した二百数十点にのぼる茶会記から得られる情報を分析整理して項目別に論じる。そのうち第二章では人物を、第三、七章では茶道具を扱う。すなわち、第三章で茶道具全般の時代による変遷を考察し、第四章で書画を、第五章で中国陶磁を、第六章で朝鮮陶磁を、第七章で日本陶磁を取り上げる。そして第八章では料理を、第九章では点前を取り上げる。最後に、茶会記研究から得られた重要な茶の理念として「数寄」を考察する。

各章の標題と内容の要旨は以下のとおりである。

第一章の「茶会記とは何か」では、これまで正面きって論じられたことのない茶会記の性格や特質などを考察して、茶会記論を試みる。

第二章の「茶会記に現れる人物の諸相」では、茶会記に現れる人物について、桃山時代、江戸時代、明治時代以降にわけて、それぞれテーマを設定し、それにもとづいて考察を行う。

第三章の「茶道具の変遷」では、茶会記が始まる十六世紀前半から現代にいたるまで、そこに記録される茶道具が変化していることを指摘し、その時代ごとの傾向と特質を論ずる。

第四章の「茶会記に現れた書画」では、茶会記に記録された書画について、その傾向と特質を論じ、さらに受容に個人崇拜が色濃く影を落としていることを検証する。

第五章の「茶会記に現れた中国産陶磁」では、茶会記に記録されたあらゆる中国産陶磁を抜き出して、その傾向と特質を論じ、茶入については特に一節を設けて論ずる。

第六章の「茶会記に現れた朝鮮陶磁」では、茶会記に記録された朝鮮半島産の陶磁器について、その傾向と特質を論じ、なぜ朝鮮半島産の茶碗が茶の湯に受け入れられたかを特に一節を設けて検証する。

第七章の「茶会記に現れた日本陶磁」では、茶会記に記録された日本産陶磁についてその傾向と特質を論じ、加えて中国・朝鮮半島・日本産の陶磁器が、茶道具のなかでどのように選択受容されたかを、「棲み分け」の考え方によって検証し、日本産茶入についても一節を設けて論ずる。

第八章の「茶会記に現れた料理」では、茶会記における料理記録についてその傾向と特質を論じ、茶料理の素材と調理法に検討を加え、さらに茶菓子について別に一節を設けて、その変遷を論ずる。

第九章の「点前の成立と変遷」では、点前の語の意味とその変遷について考察した後、茶会記の記述に即して、茶の湯の点前の成立を床飾り、点前座・道具の持ち運びに分けて検討する。さらに成立した時代が異なる茶会記および茶書における典型的な点前の記述例を検討して、点前の変遷について論ずる。

第十章の「茶の湯における数寄」では、第三章で茶道具の変遷のうち十六世紀後半に劇的な変動がありその背景に茶の湯の理念である「佗び数寄」の成立があったことを指摘したのを承け、数寄の理念が日本でどのように変化し、茶の湯の理念として取り込まれていったかを論じ、さらに佗び数寄の成立後、その理念が変容していった課程を論ずる。

論文審査結果の要旨

本論文の評価さるべき特色と考えられるところを以下に列記してみる。

1 茶会記は、茶の研究においてのみならず、文化史・芸術史、政治史、経済史などの多くの分野において貴重な資料を提供してきた。しかし、茶会記そのものを研究のテーマとし、かつ十六世紀から今日にいたるまでの数多の茶会記を網羅的に取上げた研究は、本論文をもって嚆矢とする。本論文はその意味で日本文化の研究上、画期的な意義を有するものと言える。

2 茶会記研究にはじめて本格的にコンピュータを導入した。すなわち、茶会記から得られる情報約一万五千件をコンピュータに入力し、コンピュータが得意とする検索機能をフルに活用した。これによって、従来、断片的にしか取り上げられ得なかった多くの情報が包括的・有機的に考察され得るようになった。この点でも本論文は茶会記研究史上画期的なものと評価できる。

3 以上のような研究方法によって、いろいろな新見が本論文の中に盛り込まれることになった。一例を示せば、永禄十一年（一五六八）十月に織田信長が堺に矢銭を要求したさいの、いわゆる和平派の動向について、茶会記にあらわれた人物の動きを考察することによって解明の糸口が見出された。

4 武野紹鷗・千利休などが活躍した十六世紀後半において、茶会で用いられる道具に大きな変化が生じ、ひいて茶の歴史全体に大きな転機がもたらされたことは従来の茶道史の通説となっていたところであるが、本論文は茶会記資料によってこれを実証的に裏づけた。そしてそのことは、茶の歴史研究の基本資料として従来よく用いられていた『山上宗二記』の信憑性を高めることにもなった。

5 右に述べた十六世紀後半における茶の変貌の根底に、茶の理念・美意識の変化のあることの解明を試みた。それはまだ完結せず途上にあるものの、現象としての茶の歴史の根底に流れる茶の思想の解明の必要性に着目し、それに着手したことは、今後の茶の歴史研究の指標を示したものと評価できる。

以上のごとく、本論文は評価さるべきいくつもの特色をもっているが、なお今後の課題とすべき問題点もある。その第一は、用語の概念規定が曖昧である点である。例えば、本論文は『茶会記の研究』と題され、茶会記とは茶の湯の会の記録であるとされているが、「茶の湯」とは何かについての説明はなされていない。また、茶が単なる喫茶風習から発展して「芸能」として成立する……と論じられているが、ここの「芸能」の概念も不明確である。また十六世紀における茶の歴史の変化の根底に茶の理念の確立があるとし、それを「佗び数寄」の理念と呼んでいるが、「佗び数寄」についての概念規定も、必ずしも明確とは言いがたい。問題点の第二は和歌の伝統・禅の伝統などが茶の理念の形成にどのような役割を果たしたのかの考察が不十分な点である。それは右の「佗び数寄」の理念の不明確さにもつながる。

このような課題を残すものの、本論文は、上述のごとく、これらの瑕瑾を補って余りある意義と価値を有し、確たる史観と確たる史料による新たな茶の歴史書の誕生にも期待を抱かせるものがある。

以上のごとく、全十章よりなる、茶会記の全体的網羅的研究を内容とする上記論文を、上記三名よりなる審査委員会によって、着想の獨創性、叙述的確さ、構成の整合性などにわたって精査した結果、審査委員会の全員一致をもって、上記学位申請者に博士（芸術学）の学位を授与するのが妥当であるとの結論に達した。